

WE' ～私たちとはなにか～

DUGASAN RYAN

第1章：リサーチクエスション

私は日本生まれ、日本育ちである。そして両親はフィリピン国籍である。初対面の人にしばしば特定の質問をされることがある。それは、私がなに人であるかという質問だ。私がまだ幼い頃は、フィリピン人である自分を否定的に考えていた。小学生や中学生の頃では、自己紹介すると教室がざわつき笑い声が聞こえた。私の苗字を用いて嘲笑の対象にされたこともあった。また、同級生の一人は自分の家族に私の名前を笑い話かのように話したというエピソードも人伝いに聞いた事もある。さらに、あなたの名前は日本語ではこのように表記されないと教師に注意され表記を変えなさいと授業中にみんなの前で名前について言われたこともあった。せめて日本名が欲しいと幼かった頃は思っていた。そのため、せめて少しでも「日本人」という要素が欲しいと渴望していた為に自分自身をハーフであると答えていた。その結果、私のことをハーフだと思っていた友達も少なくない。高校生の頃は幼かった時に抱いていた「外国人」の自分に対する否定的な考えが薄れていった。その理由となるものの一つに、私自身が外国の文化や風習に憧れ、周囲にも外国に憧れや興味を抱いている友人が多くいる環境になったからだと考える。それゆえ高校生の頃には、自分自身をフィリピン人と答えていた。さらに、大学生になると、自分が日本人であるか、フィリピン人であるか気にしなくなっていた。グローバル化や多様性を尊重するような風潮が幼かった頃と比べて高まり、日本でもより身近なことになっていたからだと思う。いくつか例を挙げるとメディアでも多様性を特集する機会が多くなり、音楽でも洋楽を始め、k-pop やスペイン語の歌までの音楽がより多くの人に親しまれている。料理のジャンルでも昔から人気のあるフレンチ、イタリアン、中華などのジャンルから韓国料理、インド料理、タイ料理、ベトナム料理など他の多くの国の料理が親しまれ手軽に食せたりするようになったと感じる。そう

いった周りの風潮や環境が無意識に私自身に作用し、地球には国境がないと考えるようになり私は地球人と答えることが多くなった。

私はこの経験から、ナショナルアイデンティティは不必要なのではないかと大学生になったときに考えた。ナショナルアイデンティティとは、国籍に基づいた国民、民族的な自己認識である。しかし、私達が住む地球には国というものが存在する。外務省のホームページによると地球には196カ国あり。国連に加盟している国は193カ国であると記載されている。(外務省、2018) この196カ国というのは日本国政府が承認した国である。また、国連に加盟していないが日本が国として認めたパチカン市国などが挙げられるため数に違いがある。また他にもパチカン市国やパレスチナといった国連に正式に加盟しておらず投票権がないが、会議で発言、提案できるといった一定の参加資格を与えられた「国連オブザーバー国」という国がある。さらに「自由連合国」といわれる外交や防衛などの権限を他国に委ねた国家間の関係がある国もある。さらに、中華民国のように法学上の国家の定義、国家の三要素を満たしているが国家として承認している国が少ない「事実上の独立国」といったような国がある。このように国といってもたくさん分けられている。世界に独立国は206カ国あるという議論や、世界には327カ国あるという議論もある。

日本が承認している国でも196もの国があり、それぞれの国のもとで暮らす私達はやはり渡航する際やビザなどの事に対してナショナルアイデンティティが必要であるという議論も理解できる。しかし、私の身の回りにある小さな社会やコミュニティの中においてそういった区別は必要なのではないかと思うのだ。例えば、友人間や、クラスの中などである。なぜなら様々な国の文化、風習が交じり合っている今日、私が幼かった頃と比べて日本では「外国人」に対する偏見が少なくなったと思うからである。それゆえ私が「外国人」だという恐怖心も少なくなったのだ。それでも、アイデンティティの認識を問いてくる友人は少なくなるらない。私になに人かを質問するという事は、きっとそれほどなにか大事なものがあるのだと不思議に思う。このように私と似た経験をした同じ在留外国人は少なくないだろう。ほかの人と比べて、稀有な体験をしたことから私と同じような在留外国人に対して、どのように今までを生きていき、これから生きていくのかといったことについて興味を抱

いた。さらに、日本人とはっきり言い切れない独特な私たちはどこをホームとして生きていくのかということも興味を抱いた。そのため本研究では、在留外国人はどのようにしてアイデンティティを構築し、ホームをどことして生きているのかをリサーチクエスチョンとして研究していく。

第2章 先行研究、概念的枠組み

在留外国人という、日本と他の国の2カ国以上のバックグラウンドを持つ人のアイデンティティとホームの認識について研究を行った。そのために、ミラー成三(2017)の日本に居住している外国人のアイデンティティの議論を先行研究とした。その他に McNamara (1997) の社会的アイデンティティの概念と「ウチ」と「ソト」(中根、1967)の概念と成田(2000)の故郷の喪失と再生の概念を概念的枠組みとする。

2-1 先行研究

先行研究では、アイデンティティをどのように分析するかという分析方法に着目した。アイデンティティをどのように理解するかについて先行研究を用いることで、在留外国人がどのようにアイデンティティを構築してきたのかをより多面的に理解できるのではないかと考えたからである。

ミラー(2017)はアイデンティティには subjectivity とアイデンティティの二つの性質を持っていると述べた。subjectivity とは会話の中で自分自身をどのようにその場で表現するかという概念である。つまり、現在に至るまでに過去に自分をどう表現してきたのかの認識である。またアイデンティティとは subjectivity が連続して作り上げられたものであり、様々な subjectivity が会話の中で繰り返し表現され、どのようなアイデンティティを構築しているのかというのがミラー(2017)の議論である。この2つの性質があるにも関わらず、これまでのアイデンティティ研究においてどちらか一方にしか焦点を当てられてこなかったとミラー成三は述べている。そのため在留外国人のアイデンティティの構築を見る上で、この2つの性質を用いより多面的に在留外国人のアイデンティティを分析できるのではないかと考える。

2-2 概念的枠組み

2-2-1 社会的アイデンティティの概念

subjectivity の要素についてさらに議論を深めるため、McNamara (1997) の社会的アイデンティティの概念を用いる。McNamara (1997) subjectivity には3つの特徴があり、それらはとても重要であると述べた。それは、subject の多数の本質であることと、闘争の場としての subjectivity と時間とともに変わる subjectivity である。この3つの特徴を、ナラティブやインタビューデータの中で見つけ、subjectivity をより明確にし、アイデンティティの構築を見ることができるのではないかと考える。

2-2-2 「ウチ」と「ヨソ」

私と同じような在留外国人である研究対象者は国籍を見ると日本人ではない。また、私の両親はフィリピン人であるが、私自身フィリピンで長く過ごしていないため、タガログ語でコミュニケーションを図ることができない。さらに、フィリピンの文化や環境なども、旅行者と同等の知識しか持っておらず、いわゆる「ネイティブ」と定義できないと考えている。つまり、日本人でもなければフィリピン人でもないと自分では認識している。では、自分が何者かと考えた時に、日本に在住している在留外国人というのが適切だと考えた。

中根千枝 (1967) の議論する「ウチ」と「ヨソ」が私たち 在留外国人にもあることに注目した。日本に在住している在留外国人を「ウチ」としてその他を「ソト」と認識し、その逆もまた然りである。中根 (1967) は、アメリカでの滞在経験をもとに日本の「ウチ」の孤立性を強く表し、「ウチ」と「ヨソ」という概念を用いた。他の諸社会における「私たち」というものは、それ以外の人々(ヨソ者)という区別にも使われうるが、それと同時に、社会には「私たち」に対応する同じような集団がいくつもあり、そのなかの一つが自分の属する特定の「私たち」であるという認識があり、「私たち」はこれら他集団との円滑な関係を持つことによって、社会生活がつつがなく行われていくという解釈に基づいている(中根、1967)。したがって、日本人の「ウチ」の概念のように孤立性が強くなり、また現実行動における極端な排他性も見られない。私は在留外国人の「私たち」という集団に属しているのだが、「日本人」という他集団と円滑に関係を持ってきた。私は在留外国人として日本で生活して

いる中で、他集団との関わりを拒絶したくなる経験がないからである。そして現在、何の問題もなく社会生活を送っている。日本における「ウチ」の孤立性が強いならば、日本で過ごす在留外国人の「ウチ」も孤立性が強くなるはずである。しかし、私個人の経験では孤立性が強いとは感じない。では、ほかの研究対象者はどのように「ウチ」と「ヨソ」を感じているのかを分析する。そしてその「ウチ」と「ヨソ」がアイデンティティの構築に影響があるのか分析していく。

2-2-3 故郷の喪失と再生

リサーチクエスションにあるホームという言葉は、本研究において一つの大きなテーマである。しかし、ホームという言葉は抽象的な言葉であり研究するにあたって明確にする必要があるため、成田（2000）の故郷についての議論を用いる。

成田（2000）は、人の故郷感は一様ではなく一義的に規定することはできず定式化すること自体無意味だと述べている。したがって、本研究では、ホームを研究者が定義しない状態でデータ収集を行った。また、成田（2000）は、故郷は一人一人の人間の存在でありアイデンティティと結びついている。さらにノスタルジーとも結びついている。それ故、故郷にアイデンティティを持っていれば故郷に懐かしくあり、アイデンティティを持っていなければ懐かしさはないということだと述べている。

このようにアイデンティティと故郷は結びついているが、それが全てではなく、アイデンティティの要素の一部でしかないと指摘している。本研究対象の在留外国人のアイデンティティの構築を研究するにあたって、ホームがアイデンティティの構築に関与し、相互的に作用しているため、両方に焦点を当てて研究を行った。

第3章：データ収集法

幼少期に、現在よりも外国の文化の浸透が薄く、偏見や中傷受けていたために自分がフィリピン人だという事に嫌悪していた。しかし青年期の私は、外国の文化がより濃く日本に浸透されていたと感じた。それ故に私はフィリピン人だという事を認め始めた。そして、現在では国籍はどこで、どこの人

であるかは多文化を共有して生きることが日常的である中、さほど重要ではないと考え始めた。こういった経験が私の現在のアイデンティティである、なに人でもないという考えに至った。この考えによって私と同じ在留外国人はどのようなアイデンティティを抱きながら過ごし、どのように作り上げたのかが疑問に感じたのがこの研究の動機である、それゆえ、私と似たバックグラウンドを持っている在留外国人3人のアイデンティティの形成にフォーカスを置きナラティブ、インタビュー、絵を用い研究行った。

3-1 研究対象者

以下の研究対象者は全員仮名であり、かっこ内は国籍、性別を表している。

ジェイク (日本／タイ、男性)

ソフィア (韓国、女性)

ロックス (アメリカ、男性)

上記3名を選んだのは以下が理由である。ジェイクは現在アメリカと日本両方の国籍を持っている為、厳密には在留外国人ではない。しかし、日本とタイのハーフであるジェイクは日本で青春時代を過ごし、現在アメリカで暮らしている。ジェイクは通算で日本に14年在住しており、アメリカには通年7年在住している。タイには2回ほど旅行としていった事がある。ソフィアは生まれも育ちも韓国であるが、日本で就職し、韓国と同じくらいの年数を日本で過ごしている。日本に通算で約20年在住しており、韓国も同じように約20年在住していた。ロックスの両親はアメリカ人だが、生まれは日本というバックグラウンドを持っている。また、アメリカ、中国で生活していた過去を持ち今は生まれた日本で生活している。日本に通算で49年在住し、アメリカには通算5年在住していた。また、中国には通算で11年在住していた。これら、3人は現在日本という国で暮らす外国人、すなわち在留外国人にあたり研究動機である私の過去と似たバックグラウンドを持っている。それ故にこの3人を研究対象者として選んだ。これにより、日本を基準としたそれぞれの国の人のアイデンティティの形成と在留外国人のホームの認識を分析することができると考えた。

3-2 データ収集方法

本研究ではナラティブ、インタビュー、絵の3つを用いた。アイデンティティの構築を分析するためにはそれまでの本人の歴史や経験が必要であるためナラティブが適していると考えたためだ。私が今のなに人でもないというアイデンティティを持つようになったのは、外国人である自分が嫌いだった過去や、なに人かと問われる事に疑問を抱いた過去といったように、これまでの経験と歴史が密接に関わっているのだと考えた目である。その為、本人が過去にどのような経験をしたのか、どんな考えを持ち今日まで生きてきたのかということをストーリーとして語ってもらうナラティブが本研究に適しているのではないかと考えた。インタビューでは、ナラティブを元にその時の心情、背景をより明確にすることができると思ったからである。

絵を用いた理由としては、ホームという言葉聞いてその映像を実際に目で見ることのできる手段が絵を書いてもらうことだと考えた為、絵を研究方法として選んだ。

3-2-1 インタビュー

インタビューはナラティブを書く前後に行った。最初のインタビューでは、研究対象者の名前、年齢、性別、国籍、生まれた国、育った国、日本の通算在日年数、国籍に明記されている国の通算生活年数を聞いた。さらに、自分の国籍とアイデンティティにズレが生じた時期はあったかという質問も行った。

3-2-2 ナラティブ

ナラティブでは、自分の国籍と認識にズレが生じた時期と一致している時期の研究対象者が色濃くそのように思った出来事のエピソードを語ってもらった。また、現在研究対象者が抱いているナショナルアイデンティティを感じたエピソードの計3つのストーリーを語ってもらった。

3-2-3 絵

インタビューの中で研究対象者が思うホームを描いてもらう質問をした。今回の大きなテーマであるホームという言葉を知るとほとんどの人が風景や人物または物といったのを頭の中に映像として出てくるだろう。それを文字化するより真っ白な紙に描くとより明確に研究対象者のホームを理解することができるのではないかと考えた為、絵も用いて研究する。

第4章：データ分析

データ分析としてジェイク、ソフィア、ロックスは在留外国人としてのアイデンティティを認識してはいない。そして、自分がなに人であるかというアイデンティティは薄く自分は自分であるというアイデンティティを抱き生きていると分析した。しかし、国というボーダーがあることが前提であり、ナショナルアイデンティティを拭いきれず抱いているといった矛盾した考えを持っていることも結果として現れた。この分析結果には6つの要素があると考えた。それはアイデンティティの不動、自己意識の中でのアイデンティティ、枠組みより個を重視、職の重要性、異文化との接触とホームの認識である。これらの6つの要素により分析結果を導いた。

4-1 アイデンティティの不動

ジェイクとソフィアのデータから、青年期に確立したアイデンティティは不動なものであると分析した。ジェイクは青年期を日本で過ごし、ソフィアは青年期を韓国で過ごしている。そしてこの2人に、あなたはなに人ですかと聞かれたらどのように答えるかという質問に対してジェイクは日本人と答え、ソフィアは韓国人と答えている。このことから、在留外国人である二人は青年期にいた国のアイデンティティを抱いているのではないのだろうかと分析した。

データ 1

私：話振り出しに戻るんだけどさ、ジェイクってなに人？

ジェイク：タイ人と日本人。あ、でも

私：なに人って言われたら、なに人って答えるの？

ジェイク：例えばさ、そのてか、もし俺が新しい日本人とね、話した時に多分日本人だとは思わないと思うんだよね。容姿は日本人じゃないじゃん？ だけど、アメリカ行っても、アメリカ行っても別に俺アメリカ人じゃないしタイ人に言ってもタイ人に見えないから。だからどこに行っても、なに人なのって感じ。

私：で、その時なんて答えるの？

ジェイク：いや日本人とは答えるけど

私：なるほどね (ジェイク インタビュー 2018/6/30)

データ 2

私：そうですね、じゃ、そういうこれからも日本で過ごしていくソフィアに、じゃ、もし僕みたいな人が、ソフィアって何人ですか？って聞かれたらなんて答えるんですか？

ソフィア：韓国人ですよ、そりゃ、あんまり意識、うん、韓国人ですね。うん。

私：これ、これからどんなに月日経ってもやっぱり自分は韓国人という

ソフィア：うん、多分ルートってか、ルーツていうかそれは韓国っていうのは、それは否定もしなければこれから変える気持ちないの。

(ソフィア インタビュー 2018/8/14)

データ 1、2からアイデンティティは生まれ育った国で形成され、青年期後半、または青年期を過ぎた期間に長い間国籍と違う国で過ごしてもアイデンティティは揺らがないと分析した。エリクソンの唱えた8つの発達段階における、通常アイデンティティが確立される青年期(12~22歳)に過ごした国が自分がなに人であるかのアイデンティティに深く関わっていると考ええる。しかし、エリクソンのように一人一個アイデンティティを持っているのではなく、McNamara が述べたように一人に複数ものアイデンティティが内包しているものであると考える。その複数あるアイデンティティの中の一つに私はなに人であるかというアイデンティティがあるのではないだろうか。その私はなに人かというアイデンティティは青年期に表面は形作られ、揺れ動かない硬いものではないだろうかと私は考えた。

しかし確立したアイデンティティを不動としているが、ジェイクのデータをみると少し不安定だと考えることもできる。なに人ですかと聞かれたらなんと答えるかという質問においてジェイクは答えを最初には言わなかった。日本人と話した場合や、容姿の話をし、途中で自分がなに人であるかを疑問視していた。青年期に表面を形作った数あるアイデンティティの中の一つである私はなに人であるかというアイデンティティの表面の内側、核なる部分

は不安定であるということなのではないのだろうか。

4-2 自己意識の中でのアイデンティティ

4-1でジェイクのデータをから確立したアイデンティティは、不安定だと考えることができると述べた。以下のデータからソフィアとロックスの中のアイデンティティの意識が低いということが分析できた。

データ 3

私：話振り出しに戻るんだけどさ、ジェイクってなに人？

ジェイク：タイ人と日本人。あ、でも

私：なに人って言われたら、なに人って答えるの？

ジェイク：例えばさ、そのてか、もし俺が新しい日本人とね、話した時に多分日本人だとは思わないと思うんだよね。容姿は日本人じゃないじゃん？ だけど、アメリカ行っても、アメリカ行っても別に俺アメリカ人じゃないしタイ人に言ってもタイ人に見えないから。だからどこに行っても、なに人なのって感じ。

私：で、その時なんて答えるの？

ジェイク：いや日本人とは答えるけど

私：なるほどね （ジェイク インタビュー&ナラティブ 2018/6/30）

データ 4

私：そうですね、じゃ、そういうこれからも日本で過ごしていくソフィアに、じゃ、もし僕みたいな人が、ソフィアってなに人ですか？ って聞かれたらなんて答えるんですか？

ソフィア：韓国人ですよ、そりゃ、あんまり意識、うん、韓国人ですね。うん。

私：これ、これからどんなに月日経ってもやっぱり自分は韓国人という

ソフィア：うん、多分ルートってか、ルーツっていうかそれは韓国っていうのは、それは否定もしなければこれから変える気持ちないんです。で、ただ自分が韓国人だからっていうそのこだわりもないんですね。あのすごくドライだと思う。

(ソフィア インタビュー&ナラティブ 2018/8/14)

データ 5

私：でも先生は帰化をなさらないんですか？日本人になることはないんですね。国籍を日本にチェンジってことは

ロックス：あのね、そのね、なんかね、ちょっと必要がないってことで、そして、なんかね、ある事情で、あははは、あのね、あの一、うん、あの一、来年退職するんですよね。ここを。うん

私：そうなんですか！？

ロックス：うん。そして、あの一アメリカに引っ越すんです。

私：あ、そうなんですね

ロックス：老後はアメリカ。

私：あー

ロックス：うん、あのね、あの一以前もね、ちょっと色々考えてどうしよかなって、日本にまゝ残ろうかっていうね、あれだったんだけど私はね、あの日本に残っても日本国籍とるっていうちょっと必要性が、なんか永住者でいいかなっていう、ふふふふふ、感じで。そんなわざわざ取ろうとするっていう、あの意識はなかったんですけど。

私：それはずっとなかったってことですか？

(ロックス インタビュー&ナラティブ 2018/7/31)

データ 6

ロックス：国家？的なもの、なに人？っていうね、あれはね、なんかね、中の一つのことしかなくてね、いろんなね、他の枠がある。ね？あのカテゴリー？ジェンダーがあるでしょ？性趣向があるでしょ？そして、あのいろんな、あの一、なんか年齢？又はね、社会階級？職業？あの一、いろーいろね、あの一、あるわけですよね？あの、そこんとこで、あの一だから私はね、ちょと義母のね、あの一老後を、あの一なんか世話しないといけないうところ、いろんななんかそういう事情が出てくる、これもね一つの文化なんですよ

私：あ、はい

ロックス：あのね、国家というのは、これはね、私のね、多分質問があるから言っちゃうかもしれないんだけど、私最小限にしてる。ていう

私：なるほど

ロックス：これは、もうなるべく無視をする。なるべく考えない

私：あっ、そういう考えで

ロックス：なぜなら、あのそれは、まあ当然ね、パスポート、旅をするとかね、そこ大きくなっちゃうんだけど、あのね、普通はなるべくそれをしないで、そして人を見る場合にはなんか色々なんかね、うんざりするでしょ？なんかあの、なんか生きていてなんか色々言われたりする。それをね、なるべくね、なに人だからっていう、だからね、なるべくね、人をね、人間にみる。だからね、なんかね、思想を持つ、又は信仰を持つ、ね？それがね、国家よりももっと大きくなる重要なもの

(ロックス インタビュー&ナラティブ 2018/7/31)

データ 7

ロックス：あのーそこんこの問題は、あの私色々なんかこうして聞かれたくないとかね、ちょっとブーブー言ってるんだけど私こうして選択して日本であのー残ってあのー生活してるじゃない？だからね、こうして聞かれるってことはあまり大したことじゃないのよ。

私：なるほど

ロックス：わかる？うん、あのちょっと、やっぱ嫌なんですけど、あのーすんごく嫌だったら私ここに住んでないわけ

(ロックス インタビュー&ナラティブ 2018/7/31)

データ 3、4、5、6、7から、ソフィアは国籍を変える気もないといった韓国人としてのアイデンティティを持っていることが窺える。しかし、一見強固に見えるアイデンティティだが、ソフィアはこれに対してこだわりがなく、とてもドライに感じていると述べている。またロックスは、日本国籍を取得

する必要がなく、国家という意識を最小限にしており、そういった考えを無視していると述べている。これは、アイデンティティの自己認識がとても薄と言えるのではないだろうか。4-1で述べたジェイクの不安定なアイデンティティも本人自身の意識が低いゆえに疑問視してしまうのではないかと考えられる。

研究対象者三人は確立したアイデンティティを抱いているが、その意識はとても低いものだということが分析できた。さらに、対象者それぞれ在留外国人というアイデンティティを抱えていることや、意識をしているデータはないことから、在留外国人として意識的に生きてはいないと言えるだろう。故に、「在留外国人」という「ウチ」に所属していないのではないのだろうか考える。また『在留外国人』という「ウチ」自体がないのだろうか考える。

4-3 異文化との接触

研究対象者であるソフィアとジェイクは、日本に住む外国人という在留外国人として今を過ごしている。この二人には、日本と母国とは違う第3の国で過ごしたという経験が共通点としてデータから見ることができた。ソフィアはイギリスで過ごし、ジェイクはアメリカで過ごしているのである。この経験より、ソフィアとジェイクの国と人に対する考えに大きな変化をもたらしたのではないかと考えた。

データ 8

ソフィア：ちょうどその20年の間1年はうちの大学のあの制度のおかげあのイギリスに1年間行ったんですね。で、そういう時にそういうのも結構変わった。それちょうど四年前、と五年前なんですけど

私：イギリスでどういうことがあったんですか

ソフィア：ううん、その研究員としていって、そこで生活して見ると日本だけだったわけ、自分が韓国日本、あとはちょっとした旅行だけだったんですけど、こう、日本韓国じゃない別の第3のところで長い1年ぐらい生活したってのは初めてだったので、向こうに行ったらあの日本、韓国そんな変わんないわけよ、向こうから見て見ると。

違う世界からみると。なんか日本韓国だけで見るとキヤーキヤーしてるし日本からだ違う国の人っていうけれど、向こうっていっぱいいるじゃないですか。なので、そういうのあんまり気にしない。

(アラームがなる)

ソフィア：あーごめんなさい

私：あ、大丈夫です。

ソフィア：はい。

私：イギリス行って、その現地の人とかに、なんか聞かれたりします？

そのどこからきたの？とか

ソフィア：あーもちろん。それは互いにみんなあの結構いろんな人が混ざってるから、それは聞くけれども、だからと言ってなんか違うアレでってことは、あんまり感じない。あの、もっと長くいればいろんなことがあると思うんですけど、一年だけなので、まあ短かったし、だからといってっていうのは、あんまり感じなかったですね。

(ソフィア インタビュー&ナラティブ 2018/8/14)

データ 9

私：いきなりアメリカ行っちゃったよね？なんでいったん？

ジェイク：俺さJ高に行ってたじゃん？そこでさ、うざいやつにテストの点数負けて、下のクラスに移されたんだよね。それがきっかけでなんかやる気なくなっちゃって。プレッシャーもあったと思うんだよね。父さんの。その時に母さんからアメリカに住んでる叔母の話聞いて。ぶっちゃけ逃げるみたいに留学行っただよね。

私：そうなん？んで、どう？アメリカは

ジェイク：さっきも言ったけど、変なフィルターで見られなかったなて。日本人だからってどうこうとかなかったし。まあ見た目が日本人じゃなかったからかもしねえけど。あといろんな人いるよね。ゲイもいるし、宗教やばい感じのものもあるし。でも変に差別してなくて、それが一人一人の個性みたいな感じだったなあ

(ジェイク インタビュー&ナラティブ 2018/6/30)

データ 8、9からソフィアとジェイクは、イギリスまたはアメリカで過ご

すことによって、ほかの国の人達をフィルターを通して人を見ず、なに人だからといって特段なにも気にしていないという文化、社会とは違うものに触れた。ソフィアが生まれ育った韓国は、歴史上の問題故に「日本」という大きな社会を一つとして見ており、日本も同じように「韓国」という社会を一つとして見てお互いを「日本」「韓国」という視点で政治上では長く関わってきたことが常であった。ジェイクはアメリカに行った率直な感想で、変なフィルターで見られたことはなく、お互いを「一人の人間」として見ていると感じたということを述べた。それは、ジェイクにとって日本は相手を「一人の人間」としては見ることをしない社会だと認識しているからではないだろうかと考えることができた。このデータはソフィアとジェイクの「ウチ」と「ヨソ」を表しているのではないかと考えた。ソフィアにとっての「ウチ」は日韓であり、ジェイクにとっての「ウチ」は日本ではないだろうか。それぞれの「ウチ」ではない「ヨソ」の国の、フィルターで人を見ず、他国の人をなに人だからといって特段なにも気にしていないという新しい「普通」の中で過ごすことによって人と国の関係に対する考えは変わったのではないのだろうかと考えた。

4-4 枠組みより個

4-3で述べたジェイクとソフィアの異文化との接触による考えの変化は大きな枠組みよりも一人の人間すなわち「個」を見るということだと分析した。さらにロックスも「個」をみて人と接することがデータから見る事ができた。

データ 10

私：そっから動機なんだけど、え、じゃあ何でみんななに人かって、こ
だわるのかなって

ジェイク：え、だからそれは、日本人だからじゃない？要するに日本で
例えばフランス人が歩いてるとそっちに目がいくじゃん。それと
同じで別にアメリカで中国人とか日本人韓国人がいたとしても別
に気になんないけど。例えば日本人、あ？アメリカ、英語が日本
語英語？喋ったとするじゃんアメリカで。でも別に多分聞かれな

いと思うどこ出身なのかって聞かれないと思う

私：アメリカの風土環境にもよるよね

ジェイク：え、だから日本は、その一白血球と同じで外敵を感知するから。え、だからライオン見た時にまず日本人じゃないじゃん。外見が。いや、例えばさ、その、黒人がいるとするじゃん。黒人でも黒人って一括りにしちゃうけど、じゃあ南アフリカ共和国からきたかもしれない、コンゴからきたかもしれない、色々あるじゃん。だからきになるじゃん日本人はやっぱ。なに人なのか。だから聞かれるなに入って

私：アメリカは聞かれないの？

ジェイク：聞かれない聞かれない

私：もうなに人がいても

ジェイク：聞かれないよ

(ジェイク インタビュー&ナラティブ 2018/6/30)

データ 11

ソフィア：ただあのずっと日本で住んでいて、あの別に日本人、韓国人ってということで、やっぱりそういうフィルターかけたり、そういうことであの人を見るあれもなんか見方が変わったりとかもしないのは自分も意識もしてるしあの意識しなくても多分そう、一人の人間として見るっていうのは結構あるのかな

(ソフィア インタビュー&ナラティブ 2018/8/14)

データ 12

ソフィア：帰っちゃう。もうあのイヤーって言ってあの、ただ私、そうなんですなのであの何度か聞かれたことあるけど、嫌な思いを韓国人だから嫌な思いは直接自分は経験はあんまりした覚えがほとんどなく、あのーただーあの韓国あのまあ韓国人の日本社会の置ける言っているのが複雑ですよ。あの植民地のこともあったりその時にあの日本にあのー自分の意思で来た人もいればあのーこれざるおえなかった人ってかそういう人もいますのでそういう人たちがまたここであの特別な言い方で在日という言葉で今もう定着して生きてるのでその人たちを見る見方日本人のあの、多くの

あの表現はあまり口には出さないけれどもこう見てる見方でか見てるのがちょっとやっぱり普通のとはちょっと違うなあていうこととかあの、こう差別するあの、ヘイトスピーチとかがテレビで流れた、一時期ありましたよね。そういうの見た時はすごく嫌だったんですね。辛かったですね。

私：多分その嫌だって思うのはやっぱり自分が韓国人っていう誇りも持っているから

ソフィア：あの、え、誇りっていうか、まあアイデンティティをもっているんで関連する人たちがこう、あのなんていうかなちょっと歪んだ見方で見られてるっていうのはうん、辛かったですよね

(ソフィア インタビュー&ナラティブ 2018/8/14)

データ 13

ロックス：あのね国家というのはこれはね私のね多分質問があるから言っちゃうかもしれないんだけど、え私最小限にしてる。ていう

私：なるほど

ロックス：これはもうなるべく無視をする。なるべく考えない

私：あっ、そういう考えで

ロックス：なぜなら、あのそれは、まあ当然ねパスポート、旅をするとなねそこ大きくなっちゃうんだけど、あのね普通はなるべくそれをしないで、そして人を見る場合にはなんか色々なんかね、うんざりするでしょ？なんかあの、なんか生きていてなんか色々言われたりする。それをね、なるべくね、なに人だからっていうだからねなるべくね人をね人間にみる。だからねなんかね思想を持つ、又は信仰を持つ、ね？それがね、国家よりももっと大きくなる重要なもの

私：あ、なるほど

ロックス：うん、だからね、自分のね、精神。特に私の場合は信仰ですよ。

私：信仰が

ロックス：うん、だからあのキリスト教ですよ？うん、だからこれがすごい重要なよね？

私：国家という枠組みよりも、キリスト教という枠組みの方が

ロックス：それとまたね、人間として、うふふふふ、そういう他の人間、日本人だとはね、思わない。

(ロックス インタビュー&ナラティブ 2018/7/31)

データ 10、11、12、13からジェイク、ソフィア、ロックスは大きな枠組みで人を見ず、一人の人間として相手を見るという「個」を意識していると分析した。ジェイクはアメリカ人と日本人を比較していることからアメリカでの経験が色濃く考えに影響しているのではないだろうか。また、個を見るという話題はデータを取集する際によく出たものであった。個を見るという自分の意思が強く、フレームで見られることを嫌悪していた。しかし、「ヨソ」に対して排他的に見る特徴がある日本社会で暮らしていく中で、研究対象者3人が一度もフィルターで見られることはなかったわけではない。日本人は外敵を感知する白血球と表現したジェイクは日本でそういった経験があるためにこう述べたのであろう。ソフィアも日本で韓国へのヘイトスピーチを聞くという政治的な面において日韓のいざこざを目の当たりにしている。そして個を見ることをデータの中で一番強く表したロックスもフィルターで見られなかった経験が多ければこのようには述べないだろう。この枠・フレーム・集団で見られることへの嫌悪は同時に在留外国人というあやふや私たちを個で見て欲しいという願望を表しているのではないかと考えた。

4-5 職の重要性

なに人であるかさほど関係ないと述べる研究対象者の3人のであるが、その中の社会人であるソフィアとロックスは職が何より大事なものと分析した。「在留外国人」という集団に所属する私たちがそれぞれライフヒストリーは違う。ロックスは最初から在留外国人として生きており、ソフィアは大人になってから今在留外国人として生きている。彼らは今までの要素から在留外国人という意識はしていないが、日本という社会の中でそのようにカテゴライズされている。二人が口を揃えているのが嫌であればここにはいないということである。しかし、ナラティブから見たように多少は嫌なことが彼らにはあるのだ。それでも彼らを在留外国人とたらしめるのは職だと分析

した。

データ 14

私：今、日本は、これからも日本で？

ソフィア：多分あの、うちの大学が潰れなかったら、はははは

私：はははは

ソフィア：一応定年までここにいてる予定で、なのでずっと、でも向こうに帰るっていう、その、なんていうの、もう、自分の中ではあんまりないので、日本でやるのがより多いかなって思った。なぜかという、えとみんなこう日本に留学に来て、みんな博士とか取ったり、たら帰るのは大体のパターンなんですね。で、なので、自分が帰ってやることは私以外の人もたくさんできる、向こうで。で、あの残る人が少なかったので自分の時 10 年前なんですけど、で、その時、ま、それで自分がここで日本でやるのがもっとあるのかなと思って、今もそう思ってるので、まあ、いるのかなずっとと多分

(ソフィア インタビュー&ナラティブ 2018/8/14)

データ 15

私：あ、そうなんですね。えーっとで、それでなんですけどそのずっと国籍も韓国だし自分が韓国人で思って生きてて日本に来てやっぱりなんかそのなんか韓国人で良かったこととか嫌だったなーみたいなこととかあってあるんですかね

ソフィア：いいこと悪いこと？良かった点はあの一今の職につけ就いたこと

私：あーなるほど

ソフィア：今の仕事ができるっていうのは自分が韓国語母語話者で韓国語と日本語の比較をやってるんですけどそういうのは自分の母語があるからそういう韓国からの見方で日本語の分析もできるしその逆もできるってことなのでまあそういうことと。うーん、韓国人であって良かったっていうのはまあそんな感じですかね。ねえなんか具体的にあんまりでないな。で、えと何でしたっけ？

(ソフィア インタビュー&ナラティブ 2018/8/14)

データ 16

ロックス：就職、それがねまたあの、だから多分 30代 40代あの一の時期？大体中国から 90年代の時にあの辺でなんか決断？しないといけなかったでしょ？キャリア的に。仕事の関係で。うん、だからあのその時にほんと（なに人か）聞かれるってなんかすごい嫌だったらここにはいなかった。

私：じゃあその先生が日本で生活していこうっていうきっかけというのは仕事が大きいですか？

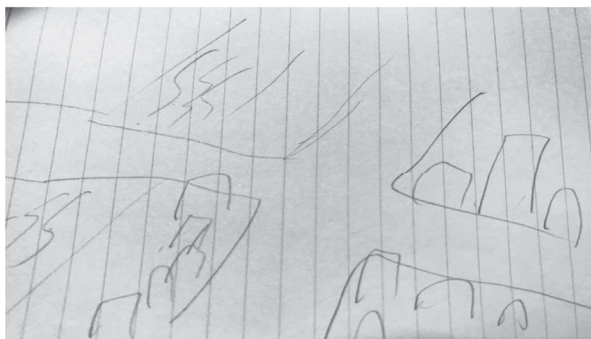
ロックス：そう、仕事が大きいですよね？うん

（ロックス インタビュー&ナラティブ 2018/7/31）

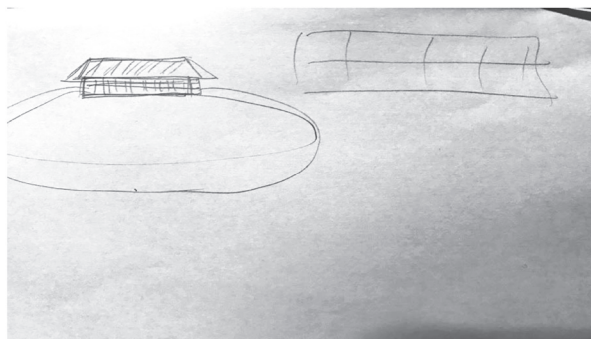
データ 14、15、16からソフィアとロックスは、就職という帰路に立った時に自分はどこでやることがあるのかということを考えている。そこに自分のやるべき「仕事」があるならばそこで生きていくという職を基準に考えていることがわかった。アイデンティティが揺らぐ、個を尊重して生きていくソフィアとロックスは、たとえ住み慣れていない場所だとしても仕事があるのなら、在留という形で生活をするのだと考えた。職をメインに考えるからこそ 4-2で述べたように在留外国人としての意識、アイデンティティが希薄であり、青年期に獲得したアイデンティティは揺らがない不動なものであり続けるのではないかと考えた。仕事がヨーロッパのどこかの国にあっても、アフリカのどこかの国にあってもソフィアとロックスは日本に住む在留外国人としての意識と同じ意識で過ごせると分析からいえるのではないだろうか。

4-6 ホームの認識

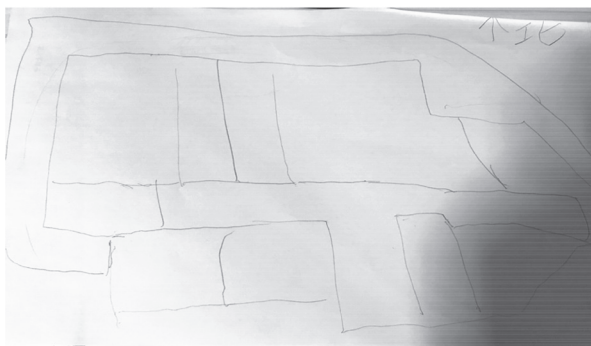
下の絵はジェイク、ソフィア、ロックスにあなたのホームを描いてくださいと言って描いてもらったものである。ジェイクは日本に住んでいた時の家の近隣を描いた。また、ソフィアは韓国の一般的な小学校の校舎とグラウンドを描いた。この小学校はソフィア本人が通っていた小学校ではない。そして、ロックスは東京に購入した自分の家の間取りを描いた。



データ 17 (ジェイク 絵 2018/6/30)



データ 18 (ソフィア 絵 2018/8/14)



データ 19 (ロックス 絵 2018/7/31)

これらのデータには研究対象者が生まれ育った国という共通点がある。また、アイデンティティが確立するという青年期にいた国でもある。このことからアイデンティティの要素の1つとしてホームというのがあり、青年期にいた場所を今でもホームとして認識しているのだと考えた。

しかし、この絵には今までの分析とは矛盾したことを表している。それは個を尊重をするのならば、「日本の地元の」や、「韓国の一般的な小学校」といったように「国」という大きな枠にとらわれた絵は書かないであろう。ホームを定義せずそれぞれが思う「ホーム」を描いてもらったためこれがより核なるアイデンティティの意識に近いものだろう。ジェイクとソフィアが嘘をついているわけではない。本人らは確かに個を意識している。しかし根の部分で国というボーダーありきの考えが寝ずいているのではないのだろうか。ホームを描いてもらったときに日本で購入した自宅の間取りを描いたロックスはジェイクとソフィアよりもよりボーダーレスな考えを表しており、国、民族ではなく一人の人間という「個」の意識が強いのではないかと分析した。2章で述べたようにホームというのはアイデンティティの一部の要素になるものゆえ、個を尊重する subjectivity と拭い切れない意識の中のボーダーである identity という「矛盾」が彼らのアイデンティティの要素になるのではないだろうか。

このように6つの要素から在留外国人を観ると、ジェイク、ソフィア、ロックスは在留外国人としてのアイデンティティを認識しておらず、自分は自分であるというアイデンティティを抱き生きていると分析した。また、異文化の影響で個を意識するということは、在留外国人という「ウチ」は排他的ではなく円滑に関係を持つことができることが言えるのではないだろうか。円滑がゆえに影響を受け、糧としているのではないだろうか。「ヨソ」である日本という社会に円滑に関係を保つことができているからこそ日本にとどまり自分のやるべき「職」に就いて過ごしているのではないだろうか。一方で根の部分でボーダーレスになりきれていない矛盾を抱えて生きている。この矛盾ゆえに不動である確立したなに人であるかとうアイデンティティ内側の部分で不安定になることもあるのだと分析から考える。

第5章

本研究は、私が在留外国人としていく中で、いくら多様性を受け入れる風潮が強くなっても私がなにも人であるか聞いてくることに対して疑問を抱いたことから始まった。

研究結果として、在留外国人としてのアイデンティティを認識してはいない。また、自分がなにも人であるかというナショナルアイデンティティは薄く、自分は自分であるというアイデンティティを抱き生きていることがデータから分析できた。しかし、根の部分で国というボーダーありきのアイデンティティを拭いきれず、抱いているといった矛盾した考えを在留外国人は持っていることも分析できた。

今回の研究では、日本に在住する数多くの中の3人を選んで分析したため、今回の分析結果は日本にいる全ての在留外国人に当てはまるものではない。しかし分析に出てきた矛盾の意識が在留外国人というつかみどころのない「歪」な私たちを作り出しているのだと考える。在留外国人である私もこれまでの人生を振り返ると自分の意識と行動に矛盾が生じた経験がある。1章で述べたように相手になにも人かと聞かれたら私は地球人ですと冗談混じりで答える。ロックスと同じように私自身ボーダーレスに考えている。しかし、自分に都合が悪いことが起きると私は外国人だからや、アルバイト先では日本語が上手だねと褒められたいというエゴな考えでフィリピン人と答えた経験がある。このように私自身も分析結果に重なる部分があった。その為、今回の分析結果は日本にいる全ての在留外国人に当てはまるものではないが、在留外国人を観ていく中で重要なポイントになり得るだろう。

今日、日本では在留外国人以外にもハーフと呼ばれる人がいる。世界に目を向けても戦争ゆえに移民となった人たちや、ソ連がロシアになったようにその土地で生きている人のナショナルアイデンティティが急変し得る出来事が起きている。グローバル化を謳っている世界だがまだまだボーダーレスにはなっていない。そんな中で私たち「歪」な在留外国人はどのように生きていくのだろうか。社会的に私たちはどのような意味があるのかと考え明確にしていくことがより多様性を認め合う社会を作り出すための要素の一つなのではないだろうかと考える。

研究結果に出たように在留外国人は、矛盾はあるものの個というものを尊重して生きている。一緒に日本という土地で暮らしているヒトとして生きているのだ。そんな中、日本を含める世界は「移民」や「外国人の」という言葉で同じヒトを分割している。これは、在留外国人だけの話だけではなく、白人、黒人という分割や、マイノリティの問題、先進国、途上国の問題といったものにも言える話ではないだろうか。多様性を認めようとしているのに、一つのことを分割し弱い立場を支援、サポートしていこうという多様性の論理から外れたことも起きている。このように世界という大きな視点で物事をみても私たち在外留外国人のように矛盾している。これは、あらゆる人も矛盾を抱えて生きていく、それが人であるっていうことを示唆している。したがって矛盾を抱えるのは良くないわけではないと言いたい。同じ地球で、同じヒトとして生まれていく私たちが真に一つになれず、ヒトとヒトに線引きして優劣をつけるという性にあらがい、私たちはグローバル化、多様性を受け入れると謳い一つになろうとしている。この問題は、昔から議論され試みている問題である。しかし、まだまだ現実になるのは難しいほどにこの問題は今日あしたで解決されるものではないのは明らかである。だからと言って何も行わないのは違うだろう。諦めず、将来の自分の子孫がいかに自分に誇りを持ち、生きやすい世界、社会を作るために少しづつ変わろうとするのが、この時代に生まれた私たちの役目なのではないだろうか。いくら、矛盾がたびこっている社会だとしても将来のために私たちは個を見えるという意識を持って生きていくべきなのではないだろうか。今、矛盾があっても将来のために私たちができることの一つであり、私たちの役目なのではないだろうか。

参考文献

- 成田龍一、藤井淑禎、安井真奈美、内田隆三、岩田重則（2000）『故郷の喪失と再生』 株式会社青弓社
- 中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係』 株式会社講談社
- ミラー成三（2017）「接触場面における礼儀的相互行為 接触場面の言語管理研究 vol.14」『日本に住む外国人の文化的アイデンティティ -Subjectivity と Identity による - 考察 -』
- TIM MCNAMARA（1997）「TESOL QUARTERLY Vol.31,No3」『Theorizing Social Identity What Do We Mean by Social Identity? Competing Frameworks, Competing Discourses』

外務省ホームページ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/world.html>

トラベラーズセンチュリークラブ ホームページ <http://travelerscenturyclub.org>